

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.6 June 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



6

## CONTENTS

### ・巻頭言

不安や不満の処し方

／井上 昭洋 ..... 1

### ・文脈で読む「身上さとし」(19)

明治 22 年 8 月

／深谷 耕治 ..... 2

### ・英語文献にみる天理教 (10)

D.C. グリーンの『Tenrikyō』(6)

／尾上 貴行 ..... 3

### ・音のちから—中国古代の人と音楽 (26)

文物が語る音の世界—月琴と阮咸—

／中 純子 ..... 4

### ・ブラジルの宗教的風景 (6)

アメリカ南部人移民の植民地経験③

／中西 光一 ..... 5

### ・ニューヨーク通信 (24)

ニューヨークの桜

／福井 陽一 ..... 6

### ・おやさと研究所ニュース ..... 7

2024 年度おやさと研究所 特別講座  
「教学と現代」「『天理教台湾伝道史』  
刊行記念 台湾伝道を振り返る」報  
告／写真展「天理大学 100 年」を  
開催／新刊紹介

## 巻頭言

## 不安や不満の処し方

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

天理教では、身上(身体)は親神からの  
かりものであり、心だけが自分のもの、すな  
わち、心だけは自由に使うこと(心の自由)  
が許されていると教えられる。では、その心  
とは一体何か。辞書的な定義に従えば、心と  
は思考・感情・意志といった人間の精神作用  
または精神的活動の総体ということになる。  
心がどこにあるかと問われれば、その問い自  
体が正しいかどうかはさておき、胸に手を当  
てる人もあれば、頭を指さす人もいるだろう。  
今日では、心は脳の機能から生まれる現象で  
あり、心は脳というハードウェアがあって成  
立するソフトウェアのようなものと捉えら  
れることが多い。また、認知科学的視点に立  
てば、心の働きは、視覚・聴覚といった知覚  
から感情や思考に至るまで、外界の情報を受  
け取り、処理し、意味づける脳の働き、すな  
わち認知機能によって支えられていると言  
える。心は認知機能を基盤として生まれる精  
神活動の総体ということになる。

人は心を持っているがゆえに、誰も不安  
を抱えたり、不満を持ったりして生きていく。  
この心理的ストレスをどのように処理するの  
かを解明しようとするのが、認知的不協和理  
論や自己防衛機能(防衛機制)理論である。  
認知的不協和とは、矛盾する2つの認知が同  
時に存在することで生じる心理的緊張状態の  
ことである。例えば、健康に悪いと知りつつ  
喫煙を続ける場合、自分は喫煙しているとい  
う自覚(認知①)と喫煙は健康に悪いという  
情報(認知②)との間に葛藤(不協和)が生  
じる。この場合、人は喫煙をやめることによ  
り不協和を解消するか(認知①の変更)、喫  
煙者でも長生きの人がいると考えたり、気分  
転換になって精神衛生上良いと考えたりする  
ことで喫煙行為を正当化して不協和を軽減し  
ようとする(認知②の変更)。このように矛  
盾する認知(思考や行動)が存在する時に生  
じる心理的な不快感とそれを解消するプロセ  
スを説明するのが認知的不協和理論である。

一方、自己防衛機能とは、心理的なストレ  
スや葛藤から自分を守るために無意識に用い  
る心理的メカニズムのことである。例えば、  
人に叱られた後に物に当たってしまうのは「置  
き換え」という自己防衛機能である。過去の  
悲惨な出来事を知らないうちに忘れてしま  
うという、受け入れ難い不快な経験を無意  
識に抑え込むという「抑圧」という自己防衛  
機能になる。原稿の締め切り間際に急に研  
究室の掃除を始めるのは、困難な状況やスト  
レスから無意識に逃げる「逃避」と呼ばれる自  
己防衛機能だ。また、満たされない状況に対  
して、もっともらしい理由をつけて正当化し、  
自分を納得させるのは「合理化」である。具  
体例として紹介されるのが、イソップ童話の  
『すっぱい葡萄』だ。空腹の狐が高い木に実  
った美味しそうな葡萄を取ろうと何度もジャン  
プするが、取ることができずに「どうせあの  
葡萄は酸っぱくて美味しくない」と自分に言  
い聞かせる話である。だが、キツネが意識的  
に現状を正当化していると考えれば、認知的  
不協和理論で説明することもできる。

交通事故にあつて腕を折った人に「打ちど  
ころが悪ければもっと大きな怪我をするこ  
ろだった」と慰めたり、被災して家を失った  
人に「家族全員が無事で良かった」と励まし  
たりするのは人の常である。このようにより  
大きな災難を想定して慰めるのも「合理化」  
と考えることができる。天理教の信者であ  
れば、「大難を小難にお連れ通りいただき、あ  
りがたい」と得心する状況だ。学生時代、心  
理学の講義で認知的不協和理論について学ん  
だ時、天理教の「大難は小難に、小難は無難に」  
という教えも、所詮心理的ストレス解消のプロ  
セスに過ぎないのかと思ったりしたが、こ  
の教えの要点は「小難を無難に」にあること  
に思いが至らなかったのだった。認知的不協  
和の起こらない「無難」の状態であっても親  
神の守護を感謝することの大切さに気づいた  
のは、少し経ってからのことである。